

◆日根野聖子 選

先日ご紹介した久松久子氏の句集「笑って五七五」(滑稽俳句協会叢書第一篇)の反響が止みません。読売新聞の平成二十八年十一月十九日の全国紙、第二頁、長谷川權先生の「四季」の欄では、「天国にカウントダウンの日向ぼこ」の句が紹介されました。

『百鳥』十二月号(大串章主宰)の結社誌でも、大きくご紹介いただきました。執筆者の徳永真弓氏は、「久松氏の滑稽俳句の特色は、長年の間に培った技に支えられていることである」として、句集の俳句を、その技ごとにご紹介くださっています。徳永氏の的確な分析、評と合わせて『百鳥』の誌面の一部をご紹介させていただきます。

「観察力と写生力、新鮮な角度から捉えられた句」

大空の窓となり行く凧一つ
亀の脚休めのかたち水温む
遠足の大きリュックに足生えて
六地藏にスタッカートの赤とんぼ
秋の蚊の止めは眉間刺しにけり

「季語が良く効いている句。季語が句全体を包んでいて、笑いに余情がある句」

彼岸明け優先席に僧眠る
忠告もその場限りの心太
老二人同じ話に走馬灯
稻雀鎮守の杜に逃げ込みぬ
遺言は後にまはして冬支度
捨て台詞一寸残る白障子

「軽やかに自由に飛翔している句。言葉遊びや韻が楽しい句」

宝船枕にクルーズ気分かな
しやぼん玉ぼくら兄弟ばびぶべぼ

選挙戦地盤看板春一番

軽すぎる悩みに跳ねて水馬

虫の声夜明けのスキャットに終る

「鋭さや批判精神が感じられる句」

入学児そんじよそこいらの子でいい

蜘蛛の囲や電話一つで商売す

敗戦忌知らざあ言つて聞かせやせう

戦なき畑に西瓜の爆発す

悲しみや怒りに対して、笑いの多様性、奥深さは良く指摘されるところですが、久松氏の句と徳永氏の分析によって、滑稽俳句の価値を改めて実感させていただきました。

◆金澤健 選 ～俳諧文芸と滑稽句～

考えてみますと、芭蕉も、蕪村も、一茶も自分たちは俳句という文芸をやっていると思っていた人は誰も居なかった筈です。全員、自分たちは「俳諧文芸」をやっているのだと認識していたに違いありません。そこで、俳諧文芸の特徴を探る為にも俳諧句の中から幾つか滑稽句を選んでみたいと思います。

銭臭き人にあふ夜はおぼろなり

成美

夏目成美は豪商で、一茶のパトロンだった人ですが、自分も俳諧を趣味で楽しんでいました。きっと、銭儲けの旨い話に誘われて、外出しようとするとならば、外泊だったのでしょう。儲け話とおぼろが、何とも言えずうまい具合に取り合わさっています。俳諧文芸は、大上段に構えることなく、自分の日常をありのままに詠む文芸だったのです。この句を句会に出したなら、さだめし「俺もその儲け話に乗せてくれ」と冷やかされたに違いありません。俳諧文芸の真髄は「俗を詠む」ことなのです。

蛙の子蛙になりぬ春の雨

抱一

酒井抱一は、お大名の息子で、絵師としても有名な人物です。大名の子ですから、絵にせよ俳諧にせよ、食うためにやるのではなく、遊び心で心底楽しんだ人です。この句を“当たり前のことを言うな”と怒るようでは、野暮とそしられます。ナンセンスのおかしみも是非理解して下さい。“立派なバカになる自信のない人は、普通のリコウでいた方がいい”（赤塚不二夫）。ここで言う立派なバカとは、“自由な精神、知性、独創性、人間的強さ、勇気を兼ね備えた人”のことです。俳諧文芸は、“立派なバカになろうとする人たち”が、切磋琢磨する場（座の文芸）でもあったのです。

夕涼みよくぞ男に生まれけり 其角

抱籠や妾かかへてきのふけふ 其角

かたつぶり酒の肴に這せけり 其角

閑寂の美を追求したのが芭蕉であるならば、それとは趣を異にする伊達、洒落、粹の美を追い求めたのが榎本其角です。彼の一派は江戸座と呼ばれ、一世を風靡しました。虚子の好みでなかったのが災いして現代ではあまり脚光を浴びていないのが残念です。（芭蕉は、非常に高く評価していました。）抱一同様、医者の子で食うに困らなかったようで、“遊び心満載”で大いに俳諧文芸を楽しみ、遊んだ人です。俳諧文芸のさらなる真髄は、“遊び心を持って作り事（虚）の世界を大いに楽しむ”ことにありました。